名詞「甲斐」の文法的性格

中平詩織（九州大学大学院人文科学研究科）†

Grammatical Properties of Japanese Noun 'Kai'

Shiori Nakahira (KYUSHU UNIVERSITY Graduate School of Humanities)

０　はじめに

本稿で扱う「甲斐」とは、以下の例に表れるもののことである。

（1）　「そうではない。ここに住んでいても、わしなどは頭痛持ちで、数年来、苦しんでいるよ」　「それでは湯浴みなど、やるかいがない」　正興と友人はそういって笑った。　［LBp2_00046］

（2）　私が濡れるのはいいけど、配布物が濡れては使い物にならんなる(ママ)。手提げを抱きしめながら傘を差して配布した。がんばった甲斐あって明日は一日ゆっくりできる。　［OY14_08062］

（3）　稲場と静子は少年課の人間に相談。努力の甲斐あって、朋美は更生の兆しを見せるが、稲場が「積木くずし」を出版したことでさらなる家族崩壊を招き…。　［PM51_00688］

（4）　さつまいもやかぼちゃとか　いろんな野菜がサイコロ状に切ってある　サラダ。コリコリと　かなり触感があって、食べ甲斐がある。。［OY15_07063］

上記の例は全て「甲斐」の前に何らかの要素が接続している。(1)(2)は連体修飾節相当、(3)は名詞修飾、(4)は動詞連用形と、様々な形式に名詞「甲斐」が接続し、また、その直後には「ある」「ない」といった述語が続く。名詞は主語や目的語になりうる品詞であるが、本稿で扱う「甲斐」は、文中に表れる際には文の主語や目的語・補語など自由に立つことはできず、上記のような文末（節末）に限られるといった制限がみられる。また、この「甲斐がある／ない」は一種の文法的な機能をも持っているようである。

本稿では、名詞「甲斐」の述語・前接要素はどのような語であるか、また「甲斐」はどのような文章で表れるかを「中納言」の検索結果から観察する。

１　調査方法

調査には「中納言」を用いた。名詞「甲斐」のみで検索すると、先に(1)(2)(3)(4)で述べた形式以外に、山梨県の地名であったり、名字・名前など人名相当のものであったりする固有名詞なども含まれてしまう。本稿で対象とするのは、固有名詞ではない、文法的に機

† nhs.093004@gmail.com

能する「甲斐」であるため、これでは結果が膨大になり、調査を行うには不適切である。

しかしそれら固有名詞とは別のふるまいを見せる「甲斐」の例を観察すると、以下の条件が見えてきた。

(5)　・「甲斐」の前に何らかの要素を持つ

（ア）　連体修飾節（「甲斐」の直前節末の動詞テンス形式はル）

（イ）　連体修飾節（「甲斐」の直前節末の動詞テンス形式はタ）

（ウ）　名詞＋助詞「ノ」

（エ）　動詞連用形[1]

・「甲斐」の後に続く述語が「アル」「ナイ」になる

地名・人名などの固有名詞とは異なり、文法的機能をもっていると考えられる名詞「甲斐」は(5)のいずれかの条件にあてはまる。このため、「中納言」で単語に付されている形態論情報を利用して、前接要素の形式ごと[2]に再度検索を行った。検索式は以下の通り。

A：【連体修飾】ル＋甲斐

キー: (品詞 LIKE "動詞%" AND 活用形 LIKE "連体形%") AND 後方共起: 語彙素 = "甲斐" ON 1 WORDS FROM キー WITH OPTIONS unit="1" AND tglWords="50" AND tglKugiri="" AND tglFixVariable="2"

B：【連体修飾】タ＋甲斐

キー: (品詞 LIKE "動詞%" AND 活用形 LIKE "連用形%") AND 後方共起: (品詞 LIKE "助動詞%" AND 語彙素読み = "タ" AND 語彙素 = "た") ON 1 WORDS FROM キー AND 後方共起: (品詞 LIKE "名詞%" AND 語彙素 = "甲斐") ON 2 WORDS FROM キー WITH OPTIONS unit="1" AND tglWords="50" AND tglKugiri="" AND tglFixVariable="2"

C：名詞＋ノ＋甲斐

キー: 品詞 = "名詞-普通名詞-サ変可能" AND 後方共起: (品詞 LIKE "助詞%" AND 語彙素 = "の") ON 1 WORDS FROM キー AND 後方共起: (品詞 LIKE "名詞%" AND 語彙素 = "甲斐") ON 2 WORDS FROM キー WITH OPTIONS unit="1" AND tglWords="50" AND tglKugiri="" AND tglFixVariable="2";

D：動詞連用形＋甲斐

キー: (品詞 LIKE "動詞%" AND 活用形 LIKE "連用形%") AND 後方共起: 語彙素 = "甲斐" ON 1 WORDS FROM キー WITH OPTIONS unit="1" AND tglWords="50" AND tglKugiri="" AND tglFixVariable="2"

---

[1] 動詞連用形に接続する「甲斐」は、しばしばひらがな表記で「がい」と書かれた例が見られた。この「がい」という形式は複合語になる際の連濁だと考えられ、（エ）の「甲斐」は動詞連用形に接続して名詞化する接尾辞だと考えられる。この場合も述語は「アル」もしくは「ナイ」になっており、名詞「甲斐」は述語への制限を有する。

[2] 「甲斐」に接続する連体修飾節末のテンスに注目すると、それぞれ(1)「ル甲斐」(2)「タ甲斐」の形式となっている。この「ル／タ」は連体修飾節内のテンスとしては同等の構造としてみるべきである。しかし、「中納言」の形態論情報では「ル」は〈動詞・普通形〉に、「タ」は〈動詞連用形・助動詞タ〉に分析される。検索の上では別の構造となってしまうため、別の検索式で検索を行った。

２　「甲斐」がとる述語

「甲斐」が接続する述語は「アル」もしくは「ナイ」が表れる。「甲斐」だけが独立して用いられることはなく、「甲斐がある」／「甲斐がない」といった形式で固定化されて用いられている。

「甲斐」の述語に制限があることについては寺村（1977）に同様の記述がある。また、須永 (2011) では、中古和文における語認定に、語と語の結び付きの強さ（コロケーション強度）を測る論文があり、「かひあり」「かひなし」を一語と認めるか否かという例が挙げられている。本稿で対象とするのは、現代日本語における「甲斐」のふるまいであるが、「甲斐」と存在を表わす述語間に、通時的にも共起関係が見られることの示唆になると考えられる。

３　「甲斐」の前接要素

「甲斐」の前接要素はどのようなものがあるか。注 2 でも先に述べたとおり、(1)や(2)は動詞の連体形で、連体修飾節内のテンスの対立ととれる。これらは連体修飾節として「甲斐」にかかる形式である。

(3)は名詞に助詞がついたものであるが、ここに表れる名詞は「～する」をつけると動詞としても用いられるサ変動詞に限られる。連体節内の助詞「ノ」が用いられているが、これらは全て「～シタ」に置き換えても意味が通るため、名詞＋「ノ」も連体修飾節に準じるものであると考えられる。

(4)は動詞連用形に「甲斐」が接続する。上記の 3 例とは構造が異なり、「甲斐」自体もひらがな表記で「がい」になっている例がしばしば見られる。これは和語の複合語化に表れる連濁であり、動詞連用形に「甲斐」が接続して一語となっていると分析できる。このとき、「甲斐」は名詞化接尾辞と呼ぶことができ、上記の 3 形式とは性質を異にする。

（6）　ガンバレ、ニッポン！そして、櫻井君、ＪＵＭＰのみなさんも応援しがいがありましたよね！　［OY04_01074］

「中納言」の形態論情報には、接辞としての「甲斐」と被連体修飾語としての「甲斐」の区別はなく、どちらも名詞として情報が付されるが、用例を観察すると二つの用法があることがわかる。

これらの 4 つの前接要素のうち、一番多く用いられているのは連体修飾節の「タ」であった。（タ：167 例／ル：24 例／名詞ノ：70 例／／動詞連用形：62 例）

「甲斐」の用例の特徴として、複文中に多く表れることも指摘すべき点である。
主節・従属節のどちらにも「甲斐がアル」の形式が見られるが、特に連体修飾節の節末テンス形式が「タ」の形式（B）と名詞＋ノの形式（C）は、「甲斐あって」と従属節で用いられるときの前接要素に例が多い。

(7)　このヘルパーさんと、メーカーの担当営業社員さんの努力の甲斐あって、最近では販売実績が上向き始めてきたということですね。　［OY01_01119］（従属節）

この複文を考える際、「甲斐」が接続している節としていない節とで二つの事態があることが指摘できる。(7)は〔ヘルパーと社員が努力した〕ことにより〔販売実績が上向き始めた〕一種の因果関係とも言える二つの事態が見られる。「甲斐」が接続する節は必ず先行し、その節の事態が起きた結果、別の事態が生じるという構造になる。

これは単文に表れる「甲斐」においても、文脈上で因果関係にあたる事態が存在する。(8)では〔早朝からがんばった〕ことにより〔一位の表彰台に乗る〕事態が生じている。単文の場合はその文以外の文脈で因果関係における事態を補完しており、「甲斐」にかかる連体修飾節が、別の事態を導いたという形式を表わす。

(8)　念願の１位の表彰台に乗ることができて、本当に、去年のリベンジを見事にやってのけたというわけです。寒かったし、早朝から大変でしたが、がんばってきた甲斐はありました。　［OY15_17923］

連体修飾節の「タ」が多い理由は、完了した事態が因果関係の理由となることが多いためであろう[3]。

評価表現の一部に存在の述語形式「アル／ナイ」が使われることは珍しくはない[4]。また、名詞が述部を含んで文末形式化しているという特徴は、井島 (1998) の「組立モダリティ表現」に類似している。井島氏の論文は「［犯人が都内に潜伏している］可能性がある」という文の中の「可能性」といった語に対しての考察である。文末で使用される時に限り、「可能性」にかかる連体修飾節が主題相当となり、後ろの主語に当たる名詞と述語の組立モダリティによって価値判断を下すという説明がなされている。「甲斐」も連体修飾節を必須とし、述語は「アル／ナイ」と存否を表わす。「甲斐がある」は 2 つの事態の因果関係を表わす評価表現のひとつである。

４　「甲斐」が表れる資料

サブコーパスごとの「甲斐」が使用されている数の多寡を確認する。

「甲斐」は書籍（書籍・図書館ともに）・ブログサブコーパスに多く用例が見られる。出版（書籍 76 例・図書館 97 例）とブログ（90 例）は群を抜いて使用数が多く、次いで雑誌（22 例）・ベストセラー（20 例）と続く[5]。

---

[3] 接続要素・複文で表れる「甲斐」の機能は拙稿(2009)で考察を行った。

[4] 評価のモダリティの一つとして、高梨(2010)では肯否の対立関係「必要がある」「必要がない」を取り上げている。これらは「「ことはない」「こともない」「までもない」に比べ文法化の度合いがかなり低い(p134)」と述べられている。

[5] サブコーパスごとの使用数分布のグラフは 5 章。

しかし、上述したもの以外のサブコーパスでは「甲斐」の使用数はすべて 10 例未満となっている。新聞・広報誌・白書等のサブコーパスには見られない。

これらの違いは「甲斐がある」という表現が口語的であること、また評価性を持つ表現であることが関係していると考えられる。前章で確認したが、「甲斐」は二つの事態の因果関係を表わす。このため前後の文脈を長くとれる小説やブログなどには多く用例が見られるようになり、字数の制限がある新聞・広報誌には用いられにくい。また、小説などの会話文に用いられたり感想を述べる部分は、書き言葉均衡コーパスのなかでも口語性が高いといえるため、その特徴が反映されたと考えられる。

５　「価値」との比較

「甲斐」と統語的に類似する「価値」について比較する。

「価値」も連体修飾節が接続し、文末で用いられる際は次のように存在述語「アル」もしくは「ナイ」を伴う。また、「価値がある」全体で固定化され、連体修飾節で表現された評価を行う形式となっている。

(9)　a. それはなんですかと尋ねると、「『茅の輪』です。きょうは大きな茅の輪をくぐる七夕祭りをやっているんです」と。これは一見の価値ありと喜び勇んで、天満宮と七夕祭りの関係を探るべく鳥居に向かった。　［PM21_00718］

b.リアップのシャンプーとコンディショナーを使用してますが、このシャンプーとコンディショナーが本当にいいんです。一寸高めですが、試す価値あり。発毛剤まで使えとはいいませんが。　［OC09_02675］

名詞「価値」には今まで見てきた「甲斐」との共通点がいくつか見られるが、「甲斐」との違いはどこにあるだろうか。　1 章で確認した「甲斐」と同じ検索式で検索語を「価値」に入れ替え、検索を行った。「価値」には連用形に接続する形式はないため、A,B,C のみを検索した。また、述語が「アル／ナイ」になっていないものは今回の考察対象外として除外した。

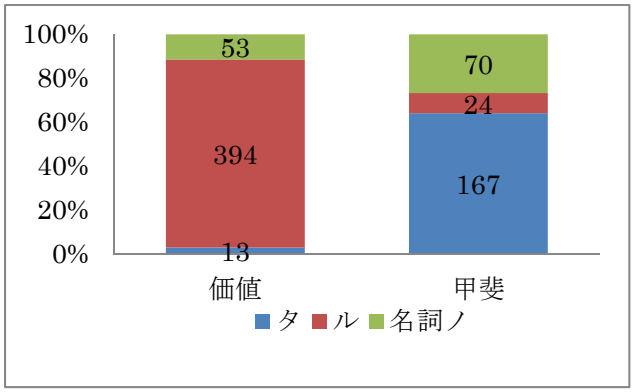

図 1　「甲斐」と「価値」の前接要素の割合

図 1 は「甲斐」「価値」にかかる連体修飾節末のテンス形式と、名詞＋「ノ」形式の割合をみたものである。

「甲斐」は連体修飾の節末テンス「タ」に接続する形式が最も多いが、「価値」では対象的に「タ」が最も少なく、「ル」の形式が最も多く、次いで名詞＋「ノ」がみられた。この名詞＋「ノ」は「一読」「一見」などが多く見られ、また節末「ル」の文末形式も「～テミル価値あり」という形式が多かった。「試す」という動詞などからも、意味的な共通性が見受けられる。

（10）　五十代以上の場合は「失敗したらやり直し・再就職ともにより厳しい」という点を考慮し、借金を清算した上で再就職の見込みがある人なら、検討してみる価値ありと言えるでしょう。　［LBr5_00042］

「甲斐」は因果関係を表わすことも可能であるため、複文中に表れることもあったが、「価値」は複文中では現れず、単文にしか例が見られない。

「価値」は評価を表わすといっても、(9b)のように何かを行うことに関しての評価を行うものである。そのため、「一読」や「～テミル」といった〔何かを試す〕表現が接続しやすいと考えられる。試した後の感想などは必須のものではないため、複文には表れない。

次に、「甲斐」と「価値」のサブコーパスごとの使用数の比較を確認する。

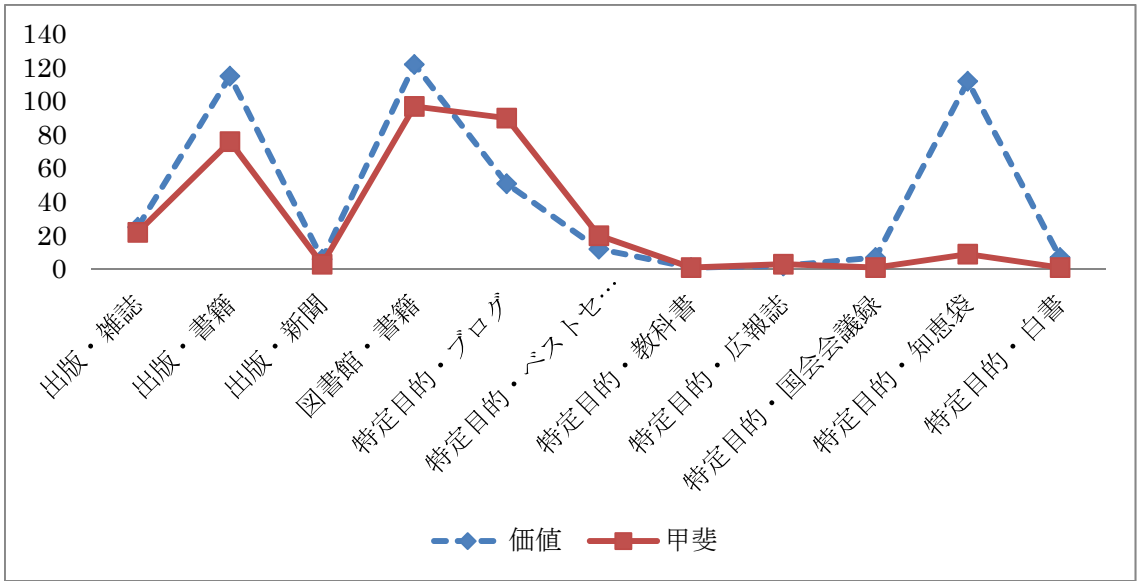

図 2　サブコーパスごとの使用数分布

使用数に違いはあるものの、「甲斐」と「価値」のサブコーパスごとの使用度合いがわかる。2 つの語は、書籍に用例が多いこと、新聞・教科書・広報誌・国会会議録・白書に用例が少ないことは共通している。しかし、同じインターネット資料であるブログと知恵袋に

おいて語ごとの使用数の偏りが見られるのが特徴的である。ブログには「甲斐」が用いられることが多く、知恵袋には「価値」の用例が多い。

これは、「甲斐がある」「価値がある」の用いられる文脈の違いがサブコーパスの性格の違いに反映されているといえる。

先に述べたように、「価値がある」は〔何かを試す〕ときに用いられる。Yahoo!知恵袋は利用者が質問を行い、別の利用者が回答をしていくサービスである。評判を問うたり使う前に確認をしたい、もしくはおすすめのものを教えてほしいといった質問に対して、推薦する文言に個人の評価「一見の価値あり」などを付け加えるため、「価値」の用例が多いのだと考えられる。次の(11)は知恵袋サブコーパスからの例で、「～教えてください。」までが質問、「切れなくなったハサミも～」からが回答となる。

（11）　切れなくなった爪切りを再び復活させる方法があれば教えてください。切れなくなったハサミも、アルミホイルをくしゃくしゃしたものを何度か切ると復活します。爪きりでも試してみる価値はあります。　［OC08_02122］

ブログは感想を書くためにも用いられるが、日記として利用されることが多いサービスである。因果関係や前後の文脈を入れることが可能なため、「甲斐」が指向されると考えられる。

６　おわりに

本稿では名詞「甲斐」が持つ文法的性格について考察を行った。以下に「甲斐」の特徴をまとめる。

（12）
- 「甲斐」は存在表現「アル」「ナイ」と共起する。
- 前接要素は連体修飾節（ル形・タ形）／名詞＋助詞「ノ」／動詞連用形がある。このうち、動詞連用形のときは「甲斐」は接尾辞相当となる。
- 「甲斐がアル／ナイ」は二つの事態の因果関係を評価する表現である。

本稿では意味の考察で連体修飾節相当のもののみを取り扱ったが、動詞連用形に接続する接尾辞「甲斐」の機能も考察が残されている。これは別稿に譲る。
また、「価値」を検索した際、「価値がある」といった形式より「価値あり」と助詞を省略し、言い切りの文末になるものがほとんどであった。このような「～～の価値あり」といった定型表現との関わりについても考察の余地があるだろう。

「甲斐」も「価値」も存否の述語をとるとしたが、「アル」のほうが用例がやや多かった。これに対しては明確な分析ができていないため、今後の課題としたい。

参考文献

井島正博 (1998) 「組立モダリティ表現」『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』汲古書院

影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房

須永哲也 (2011) 「コロケーション強度を用いた中古語の語認定」『国立国語研究所論集』2

高梨信乃 (2010) 『評価のモダリティ　現代日本語における記述的研究』くろしお出版

寺村秀夫 (1977) 「連体修飾のシンタクスと意味―その 3―」寺村 1992 所収

――― (1992) 『寺村秀夫論文集 I 』くろしお出版

中平詩織 (2009) 「形式名詞「甲斐」の意味・構造に関する一考察」『福岡大学日本語日本文学』19

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（略称 BCCWJ）検索ツール

短単位検索 Web アプリケーション「中納言」URL: http://chunagon.ninjal.ac.jp/search